岡山医学会雑誌　第129巻　December 2017, pp. 185-186

Q&A

Q 抗菌薬で経口の第三世代セフェム（メイアクト，フロモックスなど）を使おベイラビリティが低く，有効な使い道がほとんどないからというのが理由のようですが，使っている先生も多くいます．実際のところ，どのようなときに処方するのがよいのでしょうか？（研修１年）

A 第三世代セフェムは，黄色ブドウ球菌に対する抗菌活性が低下しましたが，β-ラクタマーゼに安定で大腸菌などの腸内細菌科グラム陰性桿菌（緑膿菌などのブドウ糖非発酵菌を除く）に対する抗菌活性が強くなった抗菌薬です．また，レンサ球菌や嫌気性菌の一部にも有効です．しかし，経口の第三世代セフェムは，バイオアベイラビリティが低く，最高血中濃度（Cmax）は１～４μg/ml と低いため，その使用用途は限定されます．

第三世代セフェム系経口薬を使用することができるのは，２つの場合です．第一は，MIC（最小発育阻止濃度）が非常に低い菌種による感染症で，組織濃度が低くても，効果が期待できる場合です．具体的にはレンサ球菌による咽頭炎または扁桃炎です．特に *Streptococcus pyogenes*（化膿性レンサ球菌）は第三世代セフェムに対して耐性を示すことがほとんどなく，MIC も80% 以上の菌株が0.013μg/ml 以下です．本菌による化膿性扁桃炎には，投与期間も短縮できることから，ペニシリンよりも第一選択になります．また，本菌による皮膚感染症にも有効です．ただし，肺炎球菌を含む他のレンサ球菌では，MIC 分布は高くなることがあり，やはり薬剤感受性を確認する必要があります．

第二は，薬剤が高濃度移行する臓器の感染症です．第三世代セフェム系経口薬は主に尿中に排泄され，腎で濃縮されます．薬剤によって差はありますが，尿中濃度は20～60μg/ml（増量すればさらに上昇）を示し，基礎疾患のない単純性膀胱炎に対しては有効です．特に近年は，キノロン耐性大腸菌が増加しており，耐性率が30% 以上の地域もあり，第一選択薬として使用する機会は増加してきています．しかし，発熱を伴う尿路感染症は，腎盂腎炎を含む上部尿路感染症であり，高い血中濃度を維持する必要があり，注射薬での治療が必要になります．膀胱炎でも複雑性膀胱炎では，緑膿菌や腸球菌を含む耐性菌が多くなるため，適応にはなりません．

また，近年は基質拡張型 β-ラクタマーゼ（Extended Spectrum Beta-Lactamase；ESBL）を産生する大腸菌が市中感染でも増加傾向（高い地域では約10%）にあり，臨床効果がなければ，薬剤感受性の確認と他剤への変更が必要になります．

（岡山大学病院 感染症内科　草野展周）

Q21 医師として１年が経とうとしていますが，辛いことも楽しいこともいろいろどがあれば教えてください．（研修１年）

A まず，医学書でない本をこの時期に読んでみようと思われたことが素晴らしいと思います．私にとって医学科１年生のときに出会ったヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧（みすず書房 訳：霜山徳爾）」が臨床経験20年となった今でも座右の書です．同じ著者による「それでも人生にイエスと言う（春秋社 訳：山田邦男，松田美佳）も短時間で読むには良いでしょう．本書は，ユダヤ人としてアウシュヴィッツに囚われ，奇蹟的に生還した著者が精神科医としてその経験を綴ったものです．訳者あとがきには，「この本は冷静な心理学者の眼でみられた，限界状況における人間の姿の記録である．そしてそこには，人間の精神の高さと人間の善意への限りない信仰があふれている」と紹介されています．社会的地位はおろか名前さえも奪われ，明日の保証もない極限状態におかれたなかで，フランクルは「苦悩の意味」について深く考察しています．「一人の人間がどんなに彼の避けられ得ない運命とそれが彼に課する苦悩とを自らに引き受けるかというやり方の中に（中略），たとえどんな困難の状況にあってもなお，生命の最後の一分まで，生命を有意義に形づくる豊かな可能性が開かれて

いるのである」と述べ，「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて，むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」と述べています．

苦悩の中にあって，凛としてそれに立ち向かう患者さんに出会い，その生き方に心を揺さぶられることがあると思います．そんな時私はフランクルの言葉を思い出します．苦悩にいかに果敢に立ち向かうか，人生という舞台で主役としていかに行動するか，苦悩も我々の課題であり業績である，と彼は述べています．患者さんの苦悩を代わって担うことはできませんが，その意味を共有できたらと思います．そして自分自身も常に生き方を問われていることを思い，日々を大切にしたいと思える本です．

（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
地域医療人材育成　片岡仁美）

A スタッズ・ターケル「死について！」(原書房）という本を紹介します．様々な年齢，職業の人々63人にインタビューしたものをまとめた本です．死をテーマにしたインタビューですが皆結局人生を語っています．死について考えるとそうならざるを得ないんですね．分厚い本ですが，最初から読むもよし，適当に開いて読むもよし．そこに人生があります．自分を鼓舞したい時，強く深い感動を得たい時には，この本を推薦します．ただ，この本は内容が重厚すぎるので(出てくる人の人生が濃いんです！）気楽に読めず，また歴史や文化の背景も違うため（全員アメリカ人の話です）我々の日常とちょっとかけ離れていると感じる部分もあります．

もっと気軽で身近なものでは，上原隆「友がみな我よりえらく見える日は」(幻冬社アウトロー文庫）をお薦めします．同じく市井の人々に取材した本ですが，インタビュー集という形ではなく，ルポルタージュ風にまとめられており，読みやすいです．ただ，強い感動を覚える本ではありません．出てくるのは平凡な人々がほとんどで，出会う苦難もちょっと地味です．明快な解決や爽快な逆転劇とはならず，ただただその人なりの流儀でその苦難を堪えている様子が描かれています．その姿は平凡で，時に惨めでイビツです．でも，私達が日常や臨床の現場で出会う人々により近いのはこういう人達のような気がします．身近なせいでしょうか，人生の理不尽さをより痛感させられるのはこちらの本の方です．読んでいると胸が苦しくなりますが，その後に静かに力が湧いてくるのを感じます．心の芯が折れそうな時に読んでみて下さい．強い力は与えてくれませんが，支えとなってくれる本だと思います．

医療は病気を通して人の生き様に触れる仕事です．様々な出会いがあり，良い経験も苦い経験もあるでしょう．この２冊が糧となり，あなたを支え，深めてくれることを願います．

（岡山大学病院 精神科　川田清宏）

質問内容は岡山大学病院卒業臨床研修センターのご協力のもと，ご提供頂いております．